

創造と破壊の第六位

ふくまる@のんたぬき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の手違いによって殺されてしまった主人公。

この世界を楽しむも苦しむも彼次第である。

目次

新たな天地へと	1
とあるワールドへ	6
この素晴らしい変態ロリコン神父に天罰	
を	11
魔術サイドへの干渉	16
科学と魔術の交差	20
妹属性こそ最強	24

新たな天地へと

ただひたすらに平凡以下の生活をしていた。

勉強はほとんどしない。でも成績は常に学年トップクラス。高校も推薦で決定しているのもうすることも無い。

だから、ただ学校の図書室にあった『とある魔術の禁書目録』の小説を読んでいた。もともとアニメを見て読んで読みたかったので丁度いい。

とある魔術の禁書目録の世界はとても素晴らしい。必ずといっていいほどヒーローが助けに来てくれる。

その中でも俺が好きだったキャラがネフテユスだ。

え？ 魔人だって？ そんなものは関係ない。パトリシアを助けるために……ゴホン
これ以上は語る必要は無いであろう。

「下校の時間です。皆さん帰りましょう。」

さて、下校の時刻だし帰るかな。

俺は荷物をまとめて図書室を出た。

「あ、今日新刊の発売日か。」

俺はそう言って本屋へと足を運ぶのであった。

買ったかった本を買った俺は特に何も無いので家に帰る。

すると

突然だった。

そう、この一瞬。

キキーツ!

俺は車に轢かれて死んだ。

ああ…俺は死んだのか。

てか此処はどこだ？

「やつと起きましたね。」

「ん？アンタ誰だよ…」

「私はこの世とあの世を繋ぐ神様の様なものです。」

いや、最後まで言わせろよ。

「まあ最後まで言わなくても良いからね。」

「テンプレ過ぎて草」

「はあ…折角貴方のためにとてもいい話を持ってきたって言うのに…」

ほうほう、話を聞こう。

「実はね、貴方の死は手違いなのよ…」

「え？」

「本来なら貴方は鎌池和馬先生の後釜としてとある魔術の禁書目録を書き上げて世界に進出するはずだったのよ。しかも可愛いお嫁さんも居たわ…」

「はああああ!!？」

俺が…鎌池和馬先生の神作品を書いて世界に進出だと…!？」

「そこで悪いと思つて転生を」

「ありがとうございますツツツ!!！」

俺は神様の話を逸らして腰を90度に曲げてお礼をした。

「ちなみに転生先は選べるんだけど…」

「勿論とある魔術の禁書目録で!!!」

「まあ知ってたわ。」

「さてと、転生するに当たって特典を上げるわ。」

お、特典何しようかな…

「ちなみに五つ迄なんだけど…」

大丈夫だ。問題無い。

「んじゃさ」

俺が選んだ特典は

一、完全記憶能力

一、学園都市超能力者第六位

一、能力は創造と破壊の能力

一、木原一族

一、上条当麻との関わりを持つ

「つとまあこんな所かな。」

「随分とチートですね。」

神様が呆れたように言ったから

「人生楽しまなきや損じゃん。」

と真顔で言った。

「まあそんな事より能力名はどうしますか？」

んー… そのまま創造破壊って書いて『ゲネシス・カタストロフィ』とかでいいんじゃない？

「あ、それでいいですね。使い方とかはとあるの世界に転生した後の貴方の脳内に入ってるので大丈夫ですよ。」

「了解した。」

「それでは転生を開始します。」

俺の頭の所に出して、彼女はこう呟いた。

「貴方のこれからの旅路に幸あらんことを」

そうして俺はとある魔術の禁書目録の世界へと旅立っていった。

とあるワールドへ

あの後俺は転生した。

それはいいんだ。

それはいいけどさ

なんで上空からのスタートなのおおおおお!!!

まあ能力が使えるらしいからとりあえず『創造』の力を使ってみるかな。
背中に大きな翼が生えるイメージで…

バサッバサッ!

よし、これで後は地上に降り立つだけだ。

てかこれなら天使みたいになれるくね?

下手すりゃ白い翼のせろりたんみたいに…

まあデレるような彼女がいないから意味無いんだけどね！

まあなんだかんだいって無事地上に着いた。

脳内では俺の記憶がなんか変化されている感じがする。

まあいいや。

よし、そんな事より飯だ飯！

とりあえず俺の学生寮の部屋までワープ！

とまあ俺は部屋に降り立ったんだけどさあ…

ここ上条さんの住んでる寮じゃん！

なんか見たことあるなと思ったよ！

まあ部屋に入ると物がほとんど無く、あるのは簡単な電化製品と多量の本だ。

もちろんだがラノベは置いてない。

あ、飯！

俺は急いで通帳を探そうとしたら手紙が一通と通帳や印鑑など必要なものが置いてあった。

手紙には

『やつほー☆神様だよ！君にはこの世界の事をあまり説明してなかったから説明するね！貴方はチャイルドエラーとして捨てられていたところを木原一族の木原加群に拾われて木原一族に属することになったよ。ちなみに名前が「木原勇希」というから！名前に特に意味は無いけど頑張つてね！ちなみに通帳には1億ほど入れているから無駄使いは無いように！きちんと超能力者第六位にもしたからね。それじゃあね！』

読み終わると手紙は燃えて灰になった。

「はあ…」

金が無駄に多いし。

まあいいや。飯食べに行こ。

そうして俺は飯を食べに行くことにした。

くご飯タイム終了

「ごっそさん。」

ファミレスでご飯を食べ終わった俺は店を出て街を歩きながら何をしようかと考えていた。

「まあ俺を拾ってくれた木原加群はもうグレムリンの方に行ってる可能性があるし会えねえな。」

「家に帰るか。」

やっぱり家に帰ることにした。

てか今日何曜日だ？

俺は急いで携帯で日にちを見た。

そこに書かれていたのは

7月20日

禁書目録がステルスに襲われる日じゃん!!!

さて、助けるかな（暗い笑顔）

そう考えながら俺は家へと帰宅していくのであった。

さて、家についたがそこまでの事もないしでつかい物音が聞こえたら目が覚めんだろ。

一応人払いに入らないように能力で結界作って寝るかな。

ここから、魔術と科学の『木原』との物語が始まっていくのであった。

この素晴らしい変態ロリコン神父に天罰を

俺が1時間くらい寝ていると外から物音がするのが聞こえた。

うるさいなと思いつながら外に出てみると赤い髪の子神父が家の扉とかにペタペタ何かを貼っていた。

「何してんの？」

「おや、確かに人払いをしたと思っただがねえ。」

「ふーん。お兄さんこの街の人間じゃないね。」

「なんで分かったんだい？」

「お兄さんのAIM拡散力場がよく分かんないから。」

「?なにを言ってるが分かんないけど敵なのかな？」

「まあ、そんなところだ。」

「そうか。じゃあ死ぬ。」

すると俺の目の前が火で被われた。

「普通の間がこの炎の中で生きていられるわけ…?!?」

「なんでだ!なんで僕の炎が…跡形もなく消えたんだ!」

「いやあく死ぬかと思ったー(適当)」

「くっ、灰は灰に塵は塵に吸血殺しの紅十字！」

すると真つ赤に燃える炎剣が出来た。

「安心して死ぬといい。」

その炎剣を俺に振るった。

すると、その刀は俺の一言で消えた。

「破壊」

なんの音もせず剣は消えた。

「ははは、これも効かないのなら僕も本気を出すしかないね。」

すると不良神父(笑)は言い放った。

「Fortis931」

「は？」

「これの意味はね、『必ず殺す』だよ。」

『世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ』

「魔女狩りの王 イノケンティウス！」

すると大きな炎の塊が目の前に現れた。

「でっけエ……」

思わず俺は見入ってしまった。

「なあ、それを俺に分析させてくれよ！な！な！くうーっ！今まで以上に面白そうな論文が作れそうぞ！これで『木原』を乗っ取ればジジイよりも最強の『木原』になれる！」

俺はそう言つて上の階にワープをした。

するとそこには本来倒れてては行けない少女が倒れていた。

紅く染まった修道女を身にまとい冷たいアスファルトにキスをしているかのように静かに倒れていた

すると、追いかけてきたスタイルが俺に言った。

「はあ……なんで逃げるんだよ。さっさと僕に殺されてくれないかな。」

「……は……えがやつ……のか？」

「え？」

「これはお前がやったのか!!!」

「いや、それをやったのは僕じゃなくて神さま…」

「そうか、当麻から朝に連絡もらって嘘かと思つてノリノリであいつの部屋に行こうとしたけど当麻の部屋の部屋の前で女の子が倒れてんじゃん。」

俺は怒りのあまり、本気で破壊の力を外に出していた。

「おい、不良神父…」

「は、はいい!?!」

ステイルは勇希の殺気と破壊の力の感じを察知し恐怖していた。

「死ぬ準備は出来てんだろうな?」

「俺は当麻のように甘くねえから本気で殺せるぞ。『木原』でも最強の攻撃能力を持つてるからな。さて、本当の『木原』を見せてやるよ。」

俺は右手に破壊の力を込めて言った。

「死ぬ。」

だが、俺の拳はステイルに届くことは無かった。

「勇希、何してんだ?」

そこには右手に幻想を殺す能力を持った俺の親友がいた。

そこで俺は正気に戻った。

「あれ? 俺何して…あ、当麻か。」

「あれはなんでせうか？」

不良神父を指さして言った。

「あ、あいつはお前の家に落ちてきた女の子を攫おうと……」

「も、もう攫いません！」

そう言つてステイルは逃げるように去つていった。

「ん？あれ何だつたんだ？」

そう言つて俺達はきよとんとしていた。

その後俺は能力で女の子の傷口を合わせて、俺のツテで冥土歸しの病院で受診をさせた。

魔術サイドへの干渉

あれから目が覚めた禁書目録をとりあえず上条の家に連れて帰って話を聞くことになった。

「えっと、とうまとゆうきでいいんだね？」

「ちなみに私の名前は……」

「あー知ってるからいいよ。」

俺がそれを遮るように答えた。

「それじゃあ何が聞きたいか教えて欲しいかも。」

「あいつは何なんだ？」

上条が禁書目録に聞く。

「あの人は私を追いかけてくる魔術師なんだよ。」

「ま、魔術師!？」

上条は驚いていた。俺は別に驚かないがな。

「あれ？優斗は驚いてないみたいだね。」

「まあ昔少しだけ魔術に干渉してたからな。」

「え？上条さんそんな事聞いてないですよ。」

「こんな科学の街で魔術なんて信じる人なんかいないだろ。」

「あ、確かに。」

「ゆうとは何か聞きたいことはないのかな？」

「お前はいつから学園都市に居た？てかなんでこの街に入れたんだ？」

「うーん。気がついたらもうこの街にいたかも。」

「誰かがこの街にお前を入れたとか、そんなこと出来るやつに心当たりは？」

「それは分からないんだよ。」

「今のお前に分かることは？」

「私がイギリスのシスターってことと私の魔法名だけかも…」

「そうか。分かった。」

「これからわたしはどうすればいいんだろ…」

「まあとりあえず上条の家に居てくれ。服とかは俺が持ってきてやるから。」

「え？上条さんに拒否権は…」

「無いけど？」

「デスヨネー」

「まあとりあえず飯にしようぜ。禁書目録も腹減っただろ？」

「うん！さつきからお腹がペコペコかも。」

「当麻の飯は世界一美味いからな。」

「え？上条さんが作るんでせうか？」

「もちろん。食材は？」

「ちよつと冷蔵庫見てくる。」

「おう」

「あー。1人分しか無いな。」

「仕方ねえ。スーパー行るか。」

「あ、あの…大変申し訳ないのですが…」

「ここは俺が出すから大丈夫だ。」

「申し訳ない…」

「禁書目録も行くから準備するぞ。」

「え!?ほんと！今日の晩ご飯はステーキがいいかも！」

「そんなものは上条さんの家じゃ出しません！」

「ええー！とうまのケチ！」

「まあまあ。禁書目録。当麻の料理は世界一と言っただろ。」

「んじやとりあえず行こうか。」

俺達はスーパーに行くことになり、少し日が暮れた学園都市を歩いていた。

「ちよつと当麻と禁書目録先行つててくれ。」

「ん？どうかしたか？」

「ちよつと忘れ物してさ。」

「分かったんだよ！とうま、行こ！」

「ち、ちよつと待てよ。禁書目録。」

「さてと、」

「そんな所でコソコソしてないで出てこいよ。」

「やはり気づかれましたか。」

「場所変えるか？」

「ここで結構です。」

科学と魔術の交差

「んでお前だれ？」

「私は神裂火織。魔術師です。」

「お前みたいな痴女がよくこの街に入れたな。」

「痴女は関係ないですよね？」

「まあ土御門の事も知ってるからいいけど。」

「な!？」

神裂は驚いてるけど俺この街じゃそこら辺の情報屋より情報が入ってくるんだよな

「んで要件は？」

「禁書目録を引き渡してください。」

「え？ いやだけど。」

「もう期限はすぐそこまで来てるんです！早く渡してください！」

「なんの期限だよ。」

いや知ってるけどさ

「彼女の記憶を消す期限です…」

「ふーん。」

「そ、そこまで驚いてないですね。」

「まあな。んで何で記憶を消さなきゃならないの?」

「彼女は完全記憶能力の持ち主なんです。脳に十万三千冊の魔導書を記憶しているのです。」

「

「え?俺も完全記憶能力持ってるけど?しかもこの世に存在してる全科学知識も持つてるよ?」

「ふえ?」

「あら?神裂さんが変な声を出してやんのプププー」

「あ、貴方は記憶を消さなくても…」

「うん。大丈夫。」

「じ、じゃあ何故禁書目録は記憶を消さなきゃならないのですか…」

「お前の所のボスにでも騙されてたんだろうな。」

「な、なんで…」

「そりゃ『魔神』に一番成れる存在だからだろ。」

「な、何故貴方がそれを…」

「まあ色々あってな。んで禁書目録を助ける方法を探そうか。」

「そ、そうですね。何かないでしょうか…」

まあ俺の力があれば助けられるんだがなあ…

「俺と当麻が手伝ってやるからお前らは俺らの援護をしろ。」

「貴方に何が出来ると…」

「え？助けれるけど。」

「ほ、本当なのでしようか？」

「こんな事じゃ嘘つかないから。」

「そ、それならお願いしたいのですが。」

「おけ。携帯電話とか持ってる？」

「はい。持ってますよ。」

すると俺は紙に携帯の番号を書いて神裂に渡した。

「禁書目録の記憶を消す時に俺に電話してくれ。場所やらはそっちで何とかしてくれ。」

「わ、分かりました。それではまた後日ということで。」

「ああ。あまりこの街で変な格好でいたらスキルアウト達に絡まれるからやめといた方がいいぞ。」

「こ、これは術式のせいで仕方なく…」

「あとさ…」

「なんででしょうか？」

俺は言おうとした事を言わずにそつと胸に閉じ込めた。

「いや、何でもないよ。それじゃあまた今度な。当麻には俺が言っておくから。」

「よろしくお願いします。」

そして神裂は何処かに消えていった。

「あー当麻達馬鹿みたいに買ってないだろうな…」

そちらの方が心配だった。

そしてその後当麻の家で当麻の飯を食って、禁書目録は当麻の家に泊まった。

妹属性こそ最強

あれから俺はとある研究所に向かった。

扉を開けてその場にいる彼女に声をかける。

「よお静。」

彼女は木原静。俺の妹みたいなものだ。

「あー、おにーちゃんいらっしやーい。」

うむ可愛い。天使すぎると思うがそれは胸の中に留めておこう。

「今日はこういった要件で来たの？」

「いや、特に用というのはいないだがお前の顔を見にな。」

「ふーん。おにーちゃんの癖に嬉しい事言ってくれるね。」

「お兄ちゃんの癖には余計だ。どうだ？成果は得られたか？」

「うーん。これはまだ難しいかな。」

彼女が今作っているものはタイムマシン。俺もたまに手伝っているがまだまだ完成には程遠い。

「一体いつになったら完成するんだろな。」

「ねー。瞬間移動系の能力者だつて少ないけど居るんだし出来てもおかしくは無いと思
うんだけどね。難しいな。」

「まあ俺たちはまだ若い『木原』だからな。考えることを止めなきやいつか出来るさ。」
「うん。そだねー。」

「さて、最近お前もろくに飯食つてないだろ？どつか食べに行くか？」

「え!?!いいの!!行く行く!私ステーキ食べたい!」

「おう!めっちゃ美味しいステーキの店行こうぜ!」

「そうと決まれば準備しなきや!あと風呂も入つて来なきやね。」

「おう。俺ここで待つてるから早く準備してこい。あ、煙草吸つてもいいか?」

「いいけど灰皿無いよ?」

「能力で創るから大丈夫。」

そう言つて俺は能力で灰皿を創つてテーブルに置いた。

「はつきり言つてお兄ちゃんの能力使えばタイムマシンなんて簡単に出来そうだけ
ね。」

まあ間違えでは無いな。間違えではないが

『木原』が考えることを止めることは即ち死と同じである。あのクソジジイがよく言つ
てただろ。アイツの事は嫌いだがこの言葉は正しいと俺は思うぞ。」

「ちえ、まあ私とお兄ちゃんが力を合わせたらタイムマシンなんて直ぐ出来そうだなね。」

「ああ、そうだな。」

アイツに会うためにも絶対に完成させる。意地でもだ。

「どうでもいいけど早く風呂入ってこいよ。時間無くなるぞ。」

「わー！そうだった！お兄ちゃん、覗いてもいいんだよ？」

「はいはい、覗かないから早くいけ。」

「はい。」

静がしぶしぶとお風呂場に入っていくのを確認して俺は胸ポケットから煙草取り出した。

火をつけて一度ふかす。そうして吸って、肺に煙を入れて余分な煙を出す。

「煙草、やめなきやな。」

分かっていても止められないのがこれだ。

静が上がってくる前に煙草を消し、灰皿を吸殻を能力で消す。我ながら使い勝手のいい能力だよな。

「お兄ちゃん上がったよー。」

「おう。準備も出来たか？」

「うーん。もう少しまってー。」

「ゆっくりでいいぞ。」

「いや、もう出来たからいいよ。」

「おけ、それじゃあ行こうか。」

「うん！」

そう言って彼女は俺の手を握り、一緒に研究所を出たのであった。